

ベトナム・ホイアン市発見の刻書銘瓷予察

高 島 裕 之

1. はじめに

ベトナム・ホイアンの町は、インドシナ半島の中部に位置し、交易の港として発展してきた(Fig.1)。「東南アジアの中で伝統的な港町の景観とベトナムの古都市の「市」の部分をよく保存している」という点で、1999年にユネスコの世界遺産に登録された。この旧市街の町並は、建築史学のうえでも貴重な文化財となっている。トゥーボン川沿いに開けたこの町の形成は16世紀末頃から始まる(Fig.2)。17世紀の朱印船貿易の時代に作られた日本町のあった場所としても名高く、チャンフー通りの西には、日本人が作ったという伝承の残る「日本橋」がある(Fig.3)。また日本のいわゆる鎖国政策によって、日本町が衰退して以降も、中国人が住み、町は継続して発展していった。中国の文化が浸透した様子は、旧市街の関公廟や福建会館などの建物や、現在も土地神をまつり線香を供えている例からも、うかがうことができる。

ここをフィールドとして、菊池誠一教授を代表とする昭和女子大学のチームが、1993年から発掘調査を継続してきた。現在は2006年に調査した出土資料の実測調査が行なわれており、昨年度より自らもそのメンバーに加えていただき、知識の幅を広げる機会をいただいている。

ホイアン旧市街地では、交易の中で受容された17～19世紀の中国・日本の陶瓷器が出土している。陶瓷器は遺構の年代を考える基準資料として有効に活用され、町の形成過程を明らかにしていくための手がかりとなっている^(注1)。この実測調査の成果は、昭和女子大学のチームでまとめている報告書に掲載される予定である。

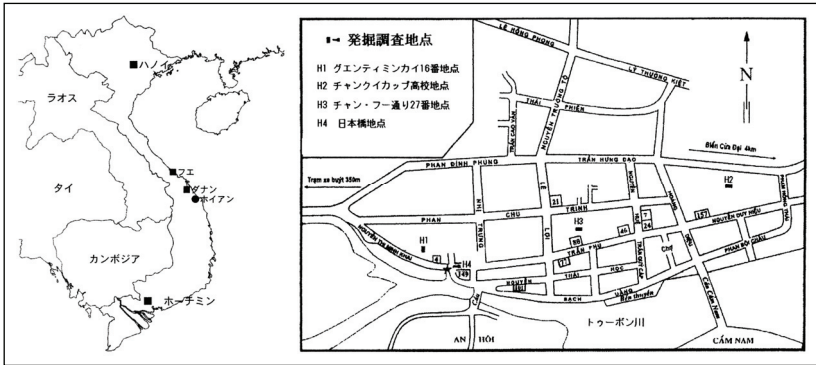


Fig.1 インドシナ半島でのホイアンの位置と 2006 年の発掘調査地点



Fig.2 トゥーボン川とホイアンの町



Fig.3 日本橋

自らはホイアン滞在の際に、貿易陶器博物館、歴史文化博物館に展示されている陶瓷器についての基本的な情報の把握も行った。そして実測調査や展示資料の見学を通して、刻書銘のある青花瓷器を確認した。今回はその資料について備忘録も兼ねてまとめ、今後ホイアンの古陶瓷器を考察するうえでの新たな可能性を提示したい。

2. ホイアン市発見の刻書銘のある陶瓷器

刻書銘は、中国・日本の生産地を問わない青花(染付)瓷器にみられる。彫り方は、径 1mm 以内の環状の道具を用いて釉面を穿ち、それを連続させる形

で文字を彫りこむ点刻であり、不明瞭な例もみられる。たいていは、皿の内側の平坦な部分に1 cm内外の大きさの漢字が彫りこまれている状況である。

旧市街の古美術商では、複数の文字が彫りこまれる例、アルファベットなど漢字以外の字が彫りこまれている例もみられた。しかし複数の文字が彫られる例では、各々文字を組み合わせた単語ではなく、個々の字が離して彫っており、1字ごとに記号としての役割を果たしている例もあった。

自らが出土資料、博物館所蔵資料の中で確認したのは、現状では2006年に調査されたグエンティミンカイ16番地出土の2点、貿易陶瓷博物館の展示資料6点、歴史文化博物館の展示資料1点である。以下各々の資料について説明を加える。

(1) グエンティミンカイ16番地出土

実測調査中に確認した資料であり、その成果は昭和女子大学のチームでまとめている報告書に掲載される予定である。未報告の資料であるので、この項ではその出土状況と自らが観察した項目について記載する。グエンティミンカイ16番地の状況については、要約して記すと私見や曲解の混じる傾向があるので、以下に日本考古学協会での報文の原文を示す。

—Tang 氏廟の裏庭に2×3m のトレンチを入れ、深さ1.6m の所から被熱したレンガの集中部分や炭化材、焼土がみつき、また17世紀後半の肥前磁器やベトナム陶器片が多量に出土した。被熱したレンガの集中部分は17世紀後半の建築遺構の一部と考えられる(菊池誠一他2007, p.82)。

—本地点では第1層から第11層まで分けられ、特に遺物が集中的に出土したのは第6層から第9層までである。遺物集中部の土層は、黄色ブロックとともに中量の炭化物・多量のレンガ片を含む黄褐色土層で、被熱レンガと肥前磁器・中国磁器・ベトナム陶器が多量に出土した。主要年代は17世紀後半から18世紀半ばである。さらに最下層にあたる第11層において17世紀前半の中国磁器が出土していることから、同地では少なくとも17世紀前半または、その前後におけるなんらかの土地利用の痕跡がうかがえる。ただし第11層は水分を含む粘土層であり、確認範囲が狭く建築遺構やその他の遺物が未検出であるため、現段階では居住区であった可能性について断定できない(菊池誠

一・小野田恵他 2010. p.108)。

出土資料の中で、刻書銘は上層である第1層出土の中国青花瓷器2点に確認できた。第1層は18世紀後半から19世紀の年代が考えられている。

①青花鳥芭蕉葉文皿：中国・福建省、広東省/18世紀末～19世紀前半

②青花岩草花文皿：中国・福建省、広東省/18世紀末～19世紀前半

各々口径 15cm 前後の直縁の丸皿である。①は内外面共に文様があり、高台内銘を伴う。内底中央に鳥文を描き、右側に芭蕉葉、左側に草花を描く。鳥文の上に「好鳥 枝頭亦 良友」という漢文を配置する。福建省徳化窯および、徳化県に隣接する永春県介福窯とされる資料に類似の意匠が確認できる(黄春淮・鄭金勤 2003. p.162 下段写真・李知宴 1982. PL.2-3-4)。「好鳥」と「枝頭亦」の間の余白に、漢文の天地とは左に90度回転する形で、「止」と推測される字が、不明瞭であるが彫られている。

②は、二重円圏の区画内に岩草花文を描く皿である。中央の岩の右側に「串」と推測される字が、明瞭に彫られている。この皿の類例は、スマトラ島沖で1822年に沈んだと推定されているテックシン沈没船の資料の中に確認できる(Nagel Auctions 2000. p.143. TS 71)。刻書銘は、文様の天地と整合している。

また①、②共に、内底に擦痕が明瞭に残り使用品と考えられる。

(2) 貿易陶器博物館

ここは建物の修築保存の際に、日本とホイアンとが協力して作った博物館である。博物館は20世紀前半に建てられた住宅を利用して、扉の装飾には中国の吉祥文様が見られる(Fig.4)。1階と2階が展示室となっており、昭和女子大学の調査成果も展示されている。入口には帆船の模型が置かれ、この港を介して広く大洋へと通じるイメージが膨れ上がる。トゥーボン川の洪水時に備え、1階から2階へ素早く荷物を運ぶ出し入れ口が、現在も残されている(Fig.5)。ガラスケース越しという状態での観察であるが、1階に展示されている6点の資料について、刻書銘が確認できた(Fig.6-9, 12-13)。



Fig. 4 扉に残る中国の吉祥文様



Fig. 5 2階荷物の出入口からみた帆船模型

①青花芙蓉手(名山手)皿：中国・江西省(景德鎮窯)/17世紀前半

日本ではいわゆる「芙蓉手」の中の「名山手」とよばれる様式の皿である。口縁外反の丸皿で、文様の描き方や口縁端部に釉の縮れがみられることから、景德鎮窯の製品と推測できる。内側面に宝珠形窓枠を8つ配置し、中に花卉文、八宝文(雑宝文)を交互に描く。内底の主文は、花卉、草、岩を描く岩草花文である。左の草の葉先部分にかかる形で、「門」の字が明瞭に点刻されている。刻書銘は、文様の天地と整合している。

②青花(染付)寿字鳳凰文皿：日本・肥前(有田)/17世紀第3四半期

直縁の丸皿で、内側面に鳳凰を3羽配置し、中央に「壽」字を大きく描く。文様の描き方は有田にあり、並列しておかれる同類の皿の中央には、ハリ支えが確認できる。内底の「壽」字の左に「卯」と推測される文字が不明瞭であるが、彫りこまれている。刻書銘は、文様の天地と整合している。

③青花岩草花文皿：中国・江西省(景德鎮窯)カ/17世紀後半

口唇部は無釉となっていて、修復が行なわれているようである。^(註3)直縁の丸皿で、内底に六角形の余白を残し、内側面を放射状に6つに分け、2種類の岩草花文を交互に配置する。花の周辺には、雑宝文の中の「方勝」を描く。肥前磁器として展示されているが、花卉を描いた文様の配置方法などが、ウンタウ沈没船や碗礁1号沈没船にみられる中国康熙年間の製品に類似すると

<貿易陶瓷博物館>



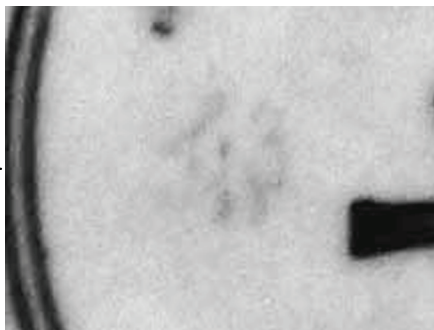
Fig. 6 ①青花芙蓉手(名山手)皿



「門」



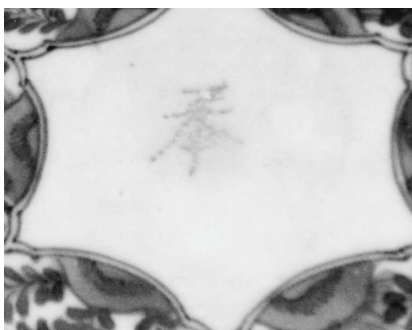
Fig. 7 ②青花(染付)壽字鳳凰文皿



「卯」



Fig. 8 ③青花岩草花文皿



「奉」

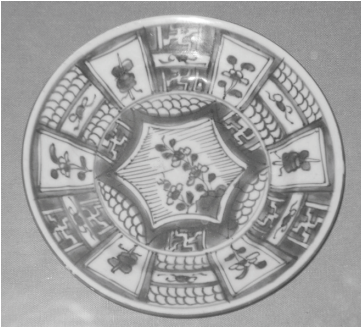
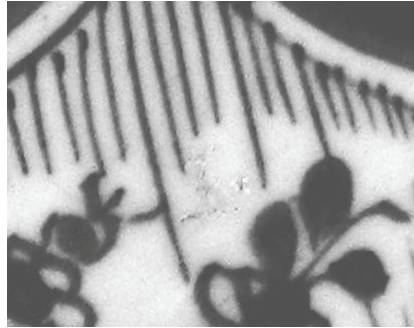


Fig. 9 ④青花芙蓉手皿



「玉」

考えられる(Christiaan J.A.Jorg・Michael Flecker 2001・碗礁一号水下考古隊編 2006)。内底の余白中央に「奉」の字が明瞭に点刻されている。

④青花芙蓉手皿：中国・福建省(徳化窯)/18世紀前半

折縁皿であり、内側面を12区画に分け、瓔珞文(地文は卍繋ぎ文と鱗文)を挟んで、花卉文と八宝文を描いた文様枠を交互に配置する。主文には鱗文と卍繋ぎ文を地文とする六角形枠を伴い、中に花卉文と岩を描く。丈の短い花卉の上に「玉」の字が彫りこまれるが、岩草花文の天地と一致していない。この芙蓉手皿の類例は、福建省徳化県文物管理委員会蔵品の中にみられ(中国上海人民美術出版社編 1983、図 155)、18世紀前半の年代が想定できるカマウ沖沈没船の中にも類似資料が確認できる(Nguyen Dinh Chien 2002. p.104. 図 18)。

⑤青花印判竹文皿：中国・福建省、広東省カ/17世紀末～18世紀初以降

口唇部は無釉となっていて切られており、修復が行なわれているようである。内面文様は竹を左側に大きく配置し、右側に岩、草、松かと思われる樹木を配置する。竹葉は上下7枚×2を一単位とした印判を用いる形で、10箇所押され、皿の左半分を埋める形である。肥前磁器として展示されているが文様の描き方が異なっており、同時代の有田の製品を写した中国製品の可能性が考えられる。最下部の竹葉下に不明僚であるが、「木」、「未」、「永」のいずれかの文字が彫りこまれている。刻書銘は、文様の天地と整合している。



Fig. 10 歴史文化博物館のある関公廟周辺



Fig. 11 屋根の軒先に並ぶ青花皿

⑥青花竹鳳凰文皿：中国・福建省、広東省カ/17世紀末～18世紀初以降

丸皿で口縁は切られており、銅線が巻きつけられている。内外面共に文様(注4)があり、高台内銘を伴う皿である。左側に竹を大きく描き、右側に鳳凰を配置する。後に述べる歴史文化博物館の皿と類似の文様、構図となっている。外面には唐草文が巡る。高台の形状や高台内銘から、⑤と同様に同時代の有田の製品を写した中国製品の可能性が考えられる。竹と鳳凰の間の余白に、鳳凰の頭に向かう形で「永」という字が明瞭に彫られている。皿全体の文様の天地とは一致していない。

(3) 歴史文化博物館

関公廟裏の寺院建築を用いて、ホイアンの歴史をテーマとした展示が行なわれている(Fig.10)。これらの屋根の軒先には、18世紀から19世紀の皿が装飾として並べられている例が多く、ここでも1822年に沈んだと推定されるテックシン沈没船の資料と一致する皿が並んでいた(Fig.11)。交易の中で大量に陶瓷器がホイアンに運ばれて、受容されるに至ったことを物語っている。刻書銘のある陶瓷器は、ホイアンの貿易陶瓷器を紹介するガラスケースに展示されている(Fig.14)。

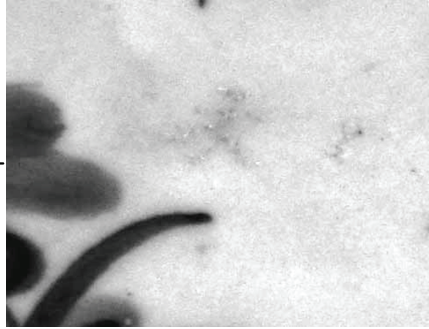
①青花(染付)印判竹鳳凰文皿：日本・肥前(有田)カ/17世紀末～18世紀初

丸皿で口縁は切られており、銅線が巻きつけられている。内外面全体に釉の氷裂がみられ、焼成は甘いようである。左側に竹、右側に鳳凰を配置して

<貿易陶磁博物館>



Fig. 12 ⑤青花印判竹文皿



「木」、「未」、「永」のいずれか



Fig. 13 ⑥青花竹鳳凰文皿

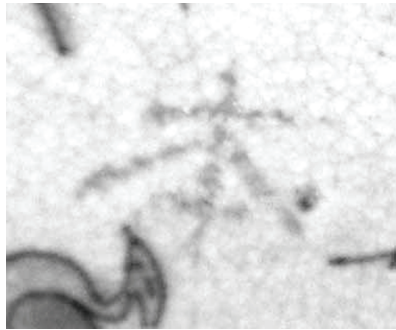


「永」

<歴史文化博物館>



Fig. 14 ①青花(染付)印判竹鳳凰文皿



「本」

いる。竹葉は上下8枚×2を一単位とした印判を用いる形で、8箇所押されている。貿易陶器博物館の⑤青花印判竹文皿の判とは一致していない。外面には如意頭唐草文が巡る。竹と鳳凰の間の内底中央余白に、「本」の文字が明瞭に点刻されている。文様の天地とは整合せず、鳳凰の嘴側を下にしている。

貿易陶器博物館の⑤と⑥はこの皿の構図と類似しており、製作の際にこの皿を模倣したことが推測できる。貿易陶器博物館の2つの皿が中国で製作された場合、この3つの製品は、中国を經由して現在ホイアンにあることが想定できる。そしてこれらは、生産されてホイアンに運ばれるまでの間に、文字が点刻されたと思われる。

3. 刻書銘の存在する意味

今回発見した刻書銘のある陶器は、種類では青花であり、器種では圧倒的に皿が多い。その寸法は出土資料としても、ホイアンで多く確認できる口径15~21cm前後の例が多い。この土地の人々にとって、この寸法の皿は必須の道具であり、民俗博物館の食卓の復元展示の中にも含まれている(Fig.15)。そして文字の彫りこまれる場所の特徴としては、皿の内底がほとんどで、描かれる文様の天地と整合しない例がある。つまり器の装飾性にこだわることなく、一目で認識しやすい場所を選択して、彫りこまれているといえる。

博物館の展示資料では収集先も不明であり、年代についても曖昧な点があるが、概ね刻書銘は17世紀後半以降の製品に確認できる。いっぽう客観的な



Fig. 15 民俗博物館の食卓の展示(右側に皿)

年代がおさえられる出土資料では、18世紀後半から19世紀に位置づけられる上層で確認されている。また古美術商に並ぶ18世紀後半~19世紀前半の同類皿には、数多くの刻書銘がみられることから、18世紀後半以降に増加することが推測できる。

出土資料では内底に使用痕と思われる擦り傷が確認でき、博物館の展示資料には破損箇所を修復した例がある。さらに生産地に関わらず中国・日本の陶瓷器に刻書銘がみられることから、文字は生産過程の中で彫りこまれたのではなく、製品として出荷された後、使用する中で彫られたと考えられる。

つまりホイアンで出土した陶瓷器の中にも刻書銘があることから、使用時にここで文字が彫られた例が確実にあることが解った。刻書銘の有無は、交易の中継地であるこの場所の出土遺物について、交易品の中で商品と使用品とを区別する判断材料の1つになることを示している。

彫りこんである文字の多くが漢字であり、ホイアンで彫られたことを仮定すると、それを行なったのは、ホイアンに住んでいた中国人、当時は漢字を用いた現地の人々が想定できる。自分の家の所有物であるという観念の中で、刻書は行なわれるというが、彫られた文字の意味については、複数あることも考えられ、類例を増加させていく中で検討していく必要がある。

この刻書銘は、中国でも福建省、広東省産の青花瓷器によくみられるという。その中には年号を刻した例もあるようであり、やはり18世紀以降が中心である。刻書銘は使用者を明らかにするという意味を持ち、その死後は、副葬品として埋葬される例もあるという。^(注5)

またこのようなホイアンで発見した刻書銘と同じように、日本の江戸時代の遺跡では、商業容器として用いられた徳利や皿などに、いわゆる「釘書き」による刻書銘がみられる。各々を比較すると、日本では彫り方に様々な種類があるが、ホイアンでは点刻が中心である。さらに皿に刻された場所をみると、ホイアンでは内底であるのに対し、日本では外底、すなわち高台内に施される例もある(Fig.16)。日本でも「釘書き」の内容は詳らかでない例も多いが、遺跡の性格や遺構での出土状況によって、屋号、地名、所有者などを表現していることが解ることもあり、様々な分析が行なわれている。^(注6)



Fig. 16 日本における釘書き
(千住宿問屋場・貫目改所跡遺跡出土)

ホイアンでは過去に刻書銘のある陶瓷器について、その内容把握も含めた資料収集が行なわれたことはないように思われる。今後、日本の遺跡における詳細な分析例や他の地域との比較を行ないながら、その類例を増やし、ホイアンにおける刻書銘のある陶瓷器の歴史的、文化的位置付けについて、深化を図っていく必要がある。そして広くその分布を追っていくことで、中国南部、インドシナ半島を含む交易のルートにおいて、東南アジアと中国文化との関係性をより明確にすることが可能であると考えられる。

4. おわりに

以上のように、中国の文化との関係の深さを測るものさしとして、陶瓷器に残る刻書銘は、ホイアン旧市街の古建築や、道教の神々をまつる風習などと共に、有効であることを述べてきた。

ホイアンにおける中国文化の影響は人々の生活の中に様々みられるが、失われつつある部分もみられる。現在、旧市街地周辺は欧米の人々を対象としたリゾート地として急速に発展しており、食堂に入ると外国人には英語のメニューが当たり前のように手渡される状況となった。失われつつある旧来の文化を現在から未来へと繋げていくためにも、これらの資料についてさらに収集を行ない、後日再考を期したい。

本稿は、平成23年度専修大学研究助成・個別研究「研究課題：交易の文化にみるアジアの陶瓷器文様」の研究成果の一部である。

今回ベトナムの調査に参加させていただき、様々なご指導と共に原稿発表についてもご快諾いただいた菊池誠一教授(昭和女子大学)に、心より感謝申し上げます。また現地調査や原稿作成の時に以下の機関や方々に、ご指導、ご協力を賜った。記して心より感謝申し上げます。(敬称略、順不同)

ホイアン市遺跡保存管理センター 関俊彦 小野田恵 堀川成美 直井麻弥 江川真澄 半田素子 飛田ちづる 佐々木彰 堀内秀樹 村上伸之 水本和美 追川吉生

<注>

- 1) 現在の町並みの成立は、1780年代以降に形成されたことが、碑文や同時代史料から判明している(菊池誠一2003. p.92)。17世紀の日本町の場所の推測を行なううえでも、陶瓷器は基準資料となっている。2006年には、4ヶ所の発掘調査が行なわれている。
- 2) 博物館展示資料の日本の有田製品の可能性については、ガラスケース越しでの不鮮明な写真であるが、村上伸之氏(有田町教育委員会)に見ていただき、ご意見をうかがった。
- 3) 博物館見学の際には、口縁が無釉であることは観察できたが、口唇部が割れ、口唇全面をカットして修復する方法については、自らは知らなかった。この修復方法は、菊池誠一氏にご教示いただいた。
- 4) 博物館見学の際には、口縁が茶褐色であり口紅装飾であると観察したが、口唇をカットして、銅線を巻きつけて修復する方法については、自らは知らなかった。口唇部の割れやすいことを避けるために、あるいは少し割れてしまったために施す方法であるという。この修復方法も、菊池誠一氏にご教示いただいた。
- 5) 中国でみられる資料の中には、年号銘の入る例があるという。また、福建・広東省の窯の製品に刻書銘が多い点、種類も青花瓷器に多い点などを含め、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)にご教示いただいた。
- 6) 日本の場合、江戸の遺跡調査の中で刻書銘のある陶瓷器の資料数も増大している。美濃部達也氏は、内藤町遺跡の釘書きの彫り方や文字内容について分類している(美濃部達也 2001)。その分析の中で彫り方には、ベタ彫り、縁取り、線刻、点刻、極太刻の例がある。文字内容は、屋号、店印、漢数字、絵模様、紋所などがある。そして宿場である「内籐新宿」における食生活・食文化の一端を反映させる資料として、位置づけている。Fig.16 に示した千住宿問屋場・貫目改所跡出土の皿では、「千」字は屋号の他、地名である「千住」の「千」を示す可能性と共に、問屋場に備え付けられていた器の可能性が指摘されている(足立区立郷土博物館 2002『東京都足立区千住宿問屋場・貫目改所跡の発掘調査』. p.63)。このように、ホイアンの資料についても類例を増加させることで、その消費のあり方が復元できると思われる。

<参考文献>

- 李知宴 1982:「徳化窯と中国古代南方の窯場」『貿易陶磁研究 NO.2』日本貿易陶磁研究会. 東京. pp.44-46

- 中国上海人民美術出版社編 1983 : 『中国陶瓷全集 27 福建陶磁』 美乃美. 京都
- 櫻井清彦監修・菊池誠一編 1998 : 『ベトナム・ホイアン考古学調査報告書—昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.4』 昭和女子大学. 東京
- 美濃部達也 2001 : 「宿場のうつわ-内藤町遺跡から出土した文字資料からのアプローチ-」 『江戸遺跡研究会第 14 回大会 食器にみる江戸の食生活〔発表要旨〕』 江戸遺跡研究会. 東京. pp.113-127
- 菊池誠一・阿部百里子編 2003 : 『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究—昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.8』 昭和女子大学. 東京
- 菊池誠一 2003 : 『ベトナム日本町の考古学』 高志書院. 東京
- 菊池誠一・小野田恵・吉田泰子 2007 : 「ベトナムの世界遺産ホイアンの考古学調査」 『日本考古学協会第 73 回総会研究発表要旨』 日本考古学協会. 東京. pp.82-83
- 小野田恵・半田素子・江川真澄・菊池誠一 2009 : 「ベトナム・ホイアン出土の陶磁器(1)」 『日本考古学協会第 75 回総会研究発表要旨』 日本考古学協会. 東京. pp.174-175
- 菊池誠一・小野田恵・半田素子・根本薫・堀内秀樹 2010 : 「ベトナム・ホイアン出土の陶磁器(2)」 『日本考古学協会第 76 回総会研究発表要旨』 日本考古学協会. 東京. pp.108-109
- 菊池誠一・阿部百里子編 2010 : 『海の道と考古学 - インドシナ半島から日本へ -』 高志書院. 東京
- 黃春淮・鄭金勤 2003 : 『徳化青花五彩瓷全書』 福建美術出版社. 福州
- 碗礁一号水下考古隊編 2006 : 『東海平潭碗礁一号出水瓷器』 科学出版社. 北京
- Nagel Auctions2000 : TEK SING TREASURES
- Christiaan J.A.Jörg・Michael Flecker2001 : “PORCELAIN FROM THE VUNG TAU WRECK The Hallstrom Excavation” Sun Tree Publishing Ltd, UK
- Nguyen Dinh Chien2002 : “TAU CO CAMAU The Ca Mau Shipwreck 1723-1735” HANOI

<挿図出典・保管先>

Fig.1 小野田恵他 2009. p.175. 図 1・2 を転載。

Fig.2-15 資料の保管先は、本文中に掲載。筆者撮影。

Fig.16 足立区地域文化課文化財係所蔵。筆者撮影。